

京都府主催

聞こえとコミュニケーションのサポートセンター事業

第1回 京都府耳のことフェスタ

第1回 京都府耳のことフェスタ

日時：2019年9月7日(土)
10:00～15:00

会場：京都府聴覚言語障害センター



パネルディスカッションの記録・報告集

社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会

〒610-0121 京都府城陽市寺田林ノ口11番64 FAX0774-55-7708 電話0774-30-9000

2019年10月発行

ごあいさつ

京都府聴覚言語障害センター
所長 加藤貴雄

本日は第1回京都府耳のことフェスタに、このようにたくさんの皆様にご参加いただきありがとうございます。京都府北部からもご参加いただいていると伺っております。遠いところご参加ありがとうございました。

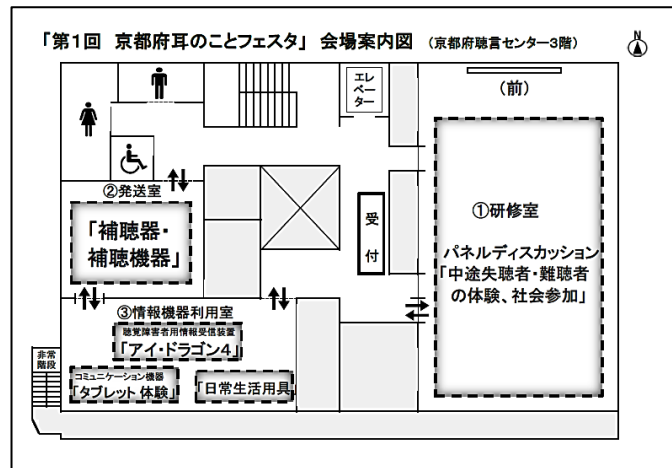
この耳のことフェスタは2018年に制定されました「京都府言語としての手話の普及を進めるとともに、聞こえに障害のある人とない人が支えあう社会づくり条例」に基づき、聞こえに障害があるも無い人もともに暮らしやすい社会づくり推進事業として、京都府から法人に委託され、その事業の一つとして、本日実施いたしております。



本日は、中途失聴者・難聴者の体験、社会参加についてをテーマとしたパネルディスカッションをはじめ、補聴機器の体験やコミュニケーション機器、情報受信装置など日常生活用具の体験ブース、個別相談などを準備しております。パネルディスカッションでお互いに学びあい、またお気軽に機器体験等をしていただければと思います。

本日の開催に当たりましては、パネラーとしてご発言いただく皆様、並びにブース出展にご協力いただく業者の皆さまの力添えをいただいております。さらに運営に当たりましては、当事者団体でございます京都府中途失聴・難聴者協会、支援団体でございます京都府要約筆記サークル連絡会の皆様とともに、サポート委員会を立ち上げて進めております。この場をお借りしまして、支えていただいております協会・サークルの皆様に感謝を申し上げます。

この第1回耳のことフェスタは、一人ぼっちの難聴者をなくそうというスローガンを掲げてられました、京都府中途失聴・難聴者協会の皆様や京都府要約筆記サークル連絡会の皆様の思いと共に開かれるものでございます。ぜひ本日を機に仲間の輪を広げていただきますことを願ひまして、私の挨拶といたします。どうもありがとうございました。



司会 乾 恵梨
(京都府聴覚言語障害センター)

只今から第1回耳のことフェスタを開会します。

会場正面のスクリーンに発言された内容を文字に変換して映します。

また、会場にはヒアリングループを敷設していますので、補聴器を装用している方は T モードに変換してもらうと音声は明瞭に聞こえます。

会場の隣の部屋では午前と午後、補聴器と補聴援助機器の展示や相談ができますので自由にご覧になってください。

職員は名札を掛けています。府内の北部・中部・南部の職員ですので、個別に相談したい方はぜひ声をおかけください。

では、パネルディスカッションをはじめます。

進行は、「聞こえのコミュニケーションサポートセンター事業」実行委員会委員長で京都府中途失聴・難聴者協会会長の滝野さんです。

パネルディスカッション司会 滝野 千里 (京都府中途失聴・難聴者協会会長)

皆さんおはようございます。京都府難聴者協会は、「京都府中途失聴・難聴者協会」に名称変更しました。身体障害者手帳の対象にならない軽・中等度の難聴者も含めて、耳のことで悩んでいらっしゃる全ての難聴の方を京都府難聴者協会の仲間として、広く迎え入れていかねばとの思いがありました。私たち難聴者は、合理的配慮が乏しい中で、本当に頑張っています。

2018年3月に、「京都府の手話言語及び多様なコミュニケーション条例」が施行されました。それを受けて私どもは、さらに頑張っていけるなあという勇気もらった気持ちです。今日は参加者の皆さんやパネラーの皆さんとともに、私たちを取り巻く環境などについて、率直に話し合っていきたいと思っています。

午前中はパネラーの皆さんに、自分が聞こえなくなって困ったこと、コミュニケーションで悩んだこと、それでも生きるために頑張っていること等を話していただきます。

また、私どもと共に『難聴者を対象とした支援に関する調査・報告書』の発刊に携わった柴田さんからも、きこえの問題についてアドバイスをいただきたいと思います。



助言者 柴田 浩志（京都府聴覚言語障害センター元所長）

皆さんこんにちは。私はこの京都府聴言センターに4年前まで勤務していきまして、現在は京都府立大学大学院でリハビリテーションを研究しています。この京都府センターができたのが2015年です。設立4年目にして、難聴者のパネルディスカッションが開かれたことを、大変うれしく思っております。よろしくお願いいたします。



滝野／それでは、パネラーの皆さん5人の自己紹介をお願いします。生まれも、育ちも、聞こえなくなった時期もそれぞれ違っています。その状況について、ゆっくり聞いていきます。トップバッターは若い人から、順番をお願いします。

パネラー 岡本 耕平（与謝野町）

皆さんこんにちは。若い者がトップバッターということで、私は京都府中途失聴・難聴者協会北部ブロック長の岡本耕平と申します。今日は私の難聴者としての経験談をお話しさせていただきますと思っています。



地域は与謝野町というところから、はるばるここに行きました。実は私の実家は京都府八幡市で、南の方にずっと住んでいたのですが、仕事の関係で綾部に行って、与謝野町に行くことになりました。城陽市から車で高速を使って2時間くらいかかります。高速も北部までまっすぐ繋がりましたので楽になったのですが、高速が繋がっていないときは、時間がかかって大変だったと聞いております。北部も最近では雪が少なくなったので雪かきも楽になったのですが、昔はやっぱり腰まで雪が積もっていた話も聞きます。よろしくお願いいたします。

パネラー 西岡 保（精華町）

皆さんこんにちは。先程岡本さんが京都府北部と言っておられましたが、私の住まいは逆で、南端の精華町から来ました。私の家から10分ほど歩けば奈良市に入るところに住んでいます。

相楽の難聴者協会に入会しております。

聞こえなくなった年齢からご説明させていただきたいと思っております。私は今も現役で仕事をしているのですが、30歳くらいに聞こえに不安を感じたのが一番最初です。職場の会議で、3、40人程度入れるような大きな会議室なんですけれども、私が聞こえにくいにも関わらず他の参加者はメモを取っておられたんですね。他の人には、この声が聞こえるのかというのが初めて難聴を感じた時です。それ以降、会社の聴力測定、健康診断で異常が認



められ、軽度の感音性難聴とわかりました。その時医者から「あんた若いのに同じ年代の聴力の半分しかないね」と言われ、40 デシベルでした。進行性の難聴ということで、23、4年経過して、今は高度難聴ということで6級の障害者手帳を持っています。

聞こえの特色としましては、聞き分けが非常に悪いということで、語音明瞭度は右35%、左55%です。6級ですけれども4級レベルの聞き分けのレベルしかないというところです。以上が私の自己紹介で、職場におけるコミュニケーションの悩みが非常にあるので、後ほどご紹介させていただければと思います。

パネラー 牧野 登紀子 (宇治市)

こんにちは。私はここから車で15分ぐらいの宇治に住んでいます。

私は難聴で、耳が悪いと自覚したのが50歳くらいです。それまでは目覚まし時計で起きていましたが、起きられなくなったのです。それまで自分の耳が悪くなったと思っていませんから、「目覚まし時計が壊れた」と思っていたんです。いろんな集まり、特にこういう集まりに行くのが大好きやったんですけども、集まりで近くにいる人が、「なんでこんな内緒話ばかりしはるんやろ」と思ったんです。ある友達と電話してましたら、「牧野さんの声はピンピン響く、おつきすぎる」と言われたんです。自分では普通にしゃべっているつもりが、耳が悪くなったら声が大きくなるんですね。そんなことも自分では分からなかった。そういうことがあって、私は耳が悪くなっているのかなとお医者さんに行きました。「補聴器をしたほうがいいですよ。危ないです」と言われて補聴器をしました。それから補聴器をしてもだんだん悪くなって、両耳補聴器をしても会話が分からなくなりました。いろんな大学病院に行きました。「悪くはなくても良くはなりません」と言われ、私はこれから聞こえなくなっちゃうんだと思いました。やっぱりその頃がつかったですね。これから、今以上に悪くなっていく。でも治しようがない。お薬も何もない。どうしようもない。これから自分はどうなっていくんだろう。その不安がありました。それからもっともっと悪くなって、主人と2人でこの距離でしゃべっても分からなくなって、宇治の「難聴者のための手話の勉強会」に入りました。そこから私の人生はパッと明るく広がっていきました。このことはまた後でお話しさせていただきたいと思います。



パネラー 松岡 智郁子 (木津川市)

皆さんこんにちは。木津川市は西岡さんがお住いの精華町のお隣で、もっと南です。奈良市に近いところです。よろしくお願ひします。

私が耳のことについて最初に意識したのは小学校5年生の時でした。臨海学校というのがありまして、全員に聴力検査をしたことがあります。その時にちょっと聞こえにくいかなという感じで言われました。それで初めて耳鼻科に行ったんですけれ



ども、その先生がなんとむごいことに、「あなたは将来聞こえなくなります」とはっきり言われました。自分は子供だったのでびっくりしたのを覚えています。母は、「この子、この先どうするんだろう。聞こえなくなったらどうするんだろう」と泣きました。

でも幸いに悪くなることはゆっくりではありました。少しずつだったので、まだ30代ぐらいまでは普通に生活ができていました。補聴器もなしで生活できました。でも、子供が学校へ通うようになって、PTAの方とお話するのに、なんか聞こえてないなと思いましたので、「耳のこと相談」という、3月にいつも催されるんですけれども、そこに行って相談したら、70デシベルだといわれて、やっぱり補聴器があったほうがいいかなというので勧められて、補聴器をつけたのが最初です。その後は急速に悪くなっていきました。現在では100デシベルを超えています。障害者手帳2級をいただいています。語音明瞭度について、西岡さんは50%とかおっしゃっていましたが、私の場合「0」と書かれてました。「あいうえお」をランダムに言われて、聞こえたら返事をする検査ですけれども、「あ」と言われて「あ」と返す。でも「は」といわれても「は」とは返せないんです。分からないんです。全然通じなくて0%です。そういうのもあって今は補聴器をつけていません。補聴器をつけても聞き返すことが多いので、つけていません。

コミュニケーション方法はいろいろあるんですけども、筆談であったり、スマホのアプリを使ってみたり、手話を勉強して手話で皆さん方とも、下手ながらも手話を読み取りながら、少しずつ会話ができるようになりました。まず、一番の救いは、このセンターにきて難聴者の皆様とお会いできたことが一番の収穫です。ここへ来れば難聴の方と会って、自分の苦しかったこと、今悩んでいることをみんな話すことができます。そして楽しく遊びながら、会話をしながら、これからのことも相談できますし、仲間がいるということはとてもありがたいと思います。ぜひこれをきっかけとして皆さんここへ来てください。

パネラー 山口 武彦（長岡京市）

こんにちは。京都府中失・難聴者協会は、北部・中部・南部と分けていますが、長岡京市はちょうど真ん中。いろいろと便利なところなので、いろんな役割に使われ気味で、ちょっとのびかけています。

私はおそらく、現在難聴者運動をしておられる方の中では、全国でも一番古いと思っています。ほとんど同じ運動した方がもう亡くなりまして、化石みたいな昔の話になるんですけれども、約60年前、正確には50年前ですけれども、ストレプトマイシンの副作用で、一年くらいの間に聞こえなくなりました。その頃はまだ副作用があることが知られていない時期だったので、結核の予防のために打ったストマイの影響で、1年くらいの間にだんだんと聞こえなくなっていったわけですね。

最初はやはり自分が聞こえなくなっているとは思わなかった。労働組合や職場の会議に出るんですが、遠くで話している人の声が聞こえにくいんですね。どうしてみんな、もっとはっきりものが言えないのかと、文句を言っていたんですけども、こっちが悪くなっていたんですね。それで耳鳴りがしていたんですけども、これが耳鳴りだということも分からなかった。その結果、やはり自分の耳が悪くなっていることに気づいたのは、そういう



ことが重なって、こちら側が悪くなっているんだとわかって、慌てて病院に行きました。

その頃の治療は、今と比べると、内耳の問題とか、有毛細胞の問題は、まだ分かっていなかった。脳の中のことでですから分からないですね。職場でもどんな治療やってるのか聞かれるんですけども、コンドロイチンとか老化防止のホルモンを使ってますと言うと笑われる。まだ27歳なのに老化防止のホルモンを使う、それからビタミンの大容量のものを注射するとかをかなり続けました。5年くらいは治すことに一生懸命で、例えば中国針がそのころはよく聞こえるようになるんだということが新聞に出るんですね。そうすると中国針を打つために、6ヶ月くらい大阪に行って針だらけになったり、母は子供を治したい思いで、一番辛かったのは母だったと思います。母は子供の病気を治したいという気持ちで、迷信ですね、いろんな新興宗教に入ってしまう。私はそれを非常に辛いと思っていましたが、1年くらいで完全に聞こえなくなってしまうました。

聞こえなくなった段階で、耳の必要な職場だったので、これは退職して、耳の要らない職場に変わろうかと考えたんですけども、実際に一番困ったのは、相談をする場所がない。出身の大学に行って、こうゆう状況で何かやりたいと言っても、そういう経験をした人がほとんどいないんですよ。結局職安に行っているいろいろ相談したんですけども、給料がその頃は半分以下でないと新しい職業は見つからないと言われてました。辞めると言っただけでも、結局そんな条件で辞める必要ないと考えて辞めないことにしたんです。その結果、職場の中ではもう辞めるつもりで上司は対応していた関係で、こんどは肩たたきにあって、「ここにいても将来性がないですよ。もっと耳の要らない職場に変わったらどうですか」ということを言われたんです。そういう時に、本当はやりたくなかったんですけども、守る会みたいなものを皆が作ったりして、結局定年まで居座りました。そのことがよかったかどうか分からないですけども、言えることは、耳が悪くなる前は障害者の問題は全く関心がなかった。実利主義的、プラグマティズムというんですけども、実利主義的な考え方を持っていたんです。判断するときには得か損かということを考えれば、明瞭にいろんなことを判断できるというように思っていたんですけども、障害になって初めていろいろな問題があるんだということが分かったことはよかったと思っています。

それから、私のころは難聴者の団体はまだなかったのですが、それから難聴者の全国の運動に参加したり、要約筆記の制度の問題もそうですけども、スタートする活動に参加したり、今ここには書いてないですけども、要約筆記の略語ですね。あれを最初に作ったり、京都の武藤さんとか、名古屋の下出さんと一緒に、ボランティアの方々と全国統一の略語を作ったり、テキストを作ったりしてきました。難聴者の国際会議にもずっと、おそらく一番出ていると思うんですけども。4年に1回の開催ですから、7回出ています。参加して難聴者の立場は非常に弱く、いい加減な運動だということを知るようになりました。今は京都府難聴者協会の会計をやっています。

滝野／それぞれ思いに溢れた発言をありがとうございました。先ほど西岡さんが右の耳が35%、左の耳が55%の聞き分け、牧野さんと松岡さんが自分のデシベルのお話をされました。ご参加いただいた方の中には、語音明瞭度やデシベルについて分からない人もいらっしゃると思うので、柴田さんから情報提供をお願いします。

柴田／皆さんは、耳の検査を受けられたことがあるでしょうか。検診のときに、ピッピとかブツという音をレシーバーから聞いてどの程度聞こえているかを検査します。私も最近家内の言っていることを聞き漏らすようになったので、先日京都市聴言センターで聴力検査を受けた所、高い音の聴力が低下しており、少し聞き取りにくくなっていました。

音の強さを表す単位がデシベルで、普通は0デシベルから20デシベルの音が聞こえます。40デシベルの音が聞こえないと補聴器が必要になります。日本では、70デシベルの音が聞こえないと身体障害者手帳が交付されますので、補聴器が必要な40デシベルとの間に非常に差があります。

司会の滝野さんが軽度・中等度難聴とっておられました、聴力が20デシベル以上70デシベル未満の方々が、まだまだ手帳を持たずに、いろいろな悩みを持っておられるということです。聴力検査器では大体120デシベルくらいまで計測できます。

次に語音明瞭度についてですが、語音聴力検査によってどの程度ことばが聞き分けられるかを表したのが語音明瞭度です。先程、パネラーの松岡さんが「あ」という音を聞いて「あ」と答える、「は」という音を聞いて「は」と答えるというように、言葉をどれぐらい判別できるかというものです。普通は100%聞き分けられるのですが、50%以下の聞き分けですと身体障害者手帳の4級に該当します。日常生活では70%を切りますと、日常生活で聞き洩らしとか、聞き違いが起こります。

純音による聴力検査と語音聴力検査を一緒に受けていただくと、より細かな聞こえの状態が分かります。語音明瞭度の検査は時間がかかるので、あまり病院ではやっていただけませんが、聴言センターでも行っていますので、ぜひ一度受けていただきたいと思います。

聞こえなくなると困ったこと

滝野／ありがとうございます。きっちりと整理していただいたところで次に移りたいと思います。「聞こえなくなると困ったこと。難聴をどのように克服していったのか」というあたりをよろしくお願いします。

たくさんの人と話をする時には、誰が何の発言をしているのかわからない

岡本／私は生まれつきの感音性難聴です。今は生まれた時に検査をしますが、私の時はまだそこまでされていなかったようで、母が私を子守しているときに、今で言うママ友と一緒に集まって話をしたりする場面で、他の子供と比べるとおとなしすぎる、例えば赤ちゃんをうるさい所へ連れて行くと泣きますよね。周りがうるさいのでギャーギャー泣きますよね。ところが私だけずっと寝てたんです。他の子と全然違うなということ、おかしいなと思って病院にもう1回連れて行って、詳しい検査をした結果「耳が聞こえていないですね」と言われ、1歳頃に難聴が判明したというのが母から聞いた話なんです。

1歳で判明したので、早いこと補聴器の申請をしまして、補聴器をつけ始めたのが大体1歳半ごろ。箱型補聴器といいまして、胸ポケットに入れて、紐がついている補聴器をつけていました。

お医者さんが福祉に精通しておられて、難聴幼児通園施設を紹介され小さい頃通って

ました。施設で言葉の訓練、「あいうえお」から50音全部、発音の訓練や聞き取りの訓練をした結果、このようにスムーズに話ができている次第です。

この訓練のおかげなのか、語音明瞭度が80%の前後の正答率で、補聴器をつけての聞こえは良いほうですねとお医者さんに言われて、手帳は3級になりました。右耳は補聴器をつけているんですけども、だいたい90デシベル前後、左耳はほぼ聞こえていなくて100デシベルを超えている。120デシベルとかそういう状態です。

やはりお医者さんからは両方に補聴器をつけて、音を拾うようにしたほうがいと勧められたんですけども、勧められた時期が遅くて、小学校6年生か中学1年生の時なんです。その頃にやっと左耳に補聴器をつけたら、お寺の鐘の音、ゴーンゴーンという耳障りな音がしましたので、我慢できないということで左耳はあきらめて、右耳だけ補聴器をしています。

私の困ったことは他の4人の方と共通する部分が多いんですけども、感音性難聴の特徴である言葉の聞き分けがどうしても難しいです。感音性難聴の方々は神経の方に問題がありますので、「あいうえお」という音が、モザイクがかかったような感じで聞こえるんですね。皆さんも似たような言葉は聞き取りにくいと思います。例えば「卵」と「タバコ」。口の形が同じであるということと、母音がどれも「あ」「あ」「お」で発音されます。子音が違うだけですね。子音がどうしても高音域になってしまいがちなので、子音があまりよく聞こえずに、卵もタバコも同じように聞こえてしまう。

それを補うために難聴者は口の動きを見ているんですね。口の動きを見ても同じ動きをしているというようなことがあります。それで言われたことをもう一回、頭の中で反芻して、「卵」だ「たばこ」だというふうに文の前後から理解、推測します。他のパネラーの方も同じような経験をしていることから、私たち難聴者は、ものすごく頭を使っているんですね。モザイクがかかって聞いているのを、頭の中で頑張っけて聞き取ろうとするんですね。でも話はずっと続きますよね。頭の中がパンクしていったって、あの人の話は、結局何が言いたかったんだろうなというような、要点が分からなくなってしまう。長い話が苦手というのが難聴者のあるあるになってくると思います。

また会議とか、たくさんの方の話聞く時には、誰が何の発言をしているのだということになってきます。私は学生時代、先生の声だけ聞いていたら勉強の中身はだいたい分かりました。そのうてテキストもありますし、黒板の文字を書き写していたら学校の勉強は大体できるんですね。ただ友達付き合いというところで、コミュニケーションの壁にぶつかりました。小学生の頃は遊びで仲良くなりましたので、コミュニケーションはさほど困らなかったのですが、中学生になると、遊びで仲良くなるというよりも、話をして気が合うな、合わないなという関係に変わってくるんですね。そこから少しずつ友達とコミュニケーションのずれを感じるようになったんですね。聞き返すと嫌な顔をされた経験を繰り返していくと、どんどん交流から離れていくんですね。中学三年生になると図書室で本を読むのが習慣となり、孤独な時期がありました。

コミュニケーションの工夫では、学生の際はFMマイクを使って声を直接補聴器に届かせる機器を使っていました。先生にFMマイクをお願いして授業を受けたり、会議の際は班にわかれたクラスメイトにマイクを回してもらおうという方法をやっていました。ただFMマイクも電池で可動しているので、一日持つわけではないですね。休み時間は電源を切って、

極力使わないようにしていたので、休み時間も使えたらよかったなど、今になって思います。

病院の待合では異常なくらい緊張する

西岡／先程岡本さんがおっしゃったとおり、聞き分けで困ったことが多いのかなと感じています。私も聞き分けが非常に悪いということで、エピソードとして、病院の待合では異常なくらい緊張することがあります。別に病気自体が緊張するという訳ではなく、呼び出しですね。呼び出しが非常に聞き分けしづらく、待合で本を読んでも、全く頭に入らずに、呼び出しにばかり気がいってしまうというようなことが起こっています。これは苦い経験というか、トラウマがありまして、5年ほど前に風邪で内科を受診した時に、「西岡さん」と呼ばれて診察室に入って、先生に風邪を診てもらって会計をすべく待合に戻ったところ、診察室の方でがやがやしているんですね。何かなと思ったら、私が順番を間違えて診察を受けていました。チェックしていないほうも悪いんですが、私自身も間違った。「西岡さん」と呼ばれたと思ったのですが、西岡さんじゃなかった。今日もパネリストとして座っていますけれども、それと同じくらい病院の待合ではドキドキしております。

音は聞こえてもメロディーが分からない

牧野／困ったことはたくさんあります。私は同窓会とかいろんな集まりに行くと、お話を聞いたり、勉強したりすることが大好きでした。ところが、耳が悪くなって、すべてできなくなりました。私は小さい時から音楽が大好きで、歌やピアノをやっていました。結婚してからもピアノを教えたり、コーラスの指揮をしたりして過ごしておりました。ところがそれが全部だめになりました。自分の耳が悪くなる前は、耳が悪くなるってことは、音がだんだん聞こえなくなるだけだと思っていました。ところが、音声は聞こえても言葉が分からない。同じように、音楽も音は聞こえるんですけどもメロディーが何も分からないんです。ピアノを教えたり、指揮をしたり、自分でコーラス・合唱に入ったり、いろいろしていたことが全部だめになりました。これがやっぱり私にとっては一番つらいことでした。

電話での話を聞き間違えてとんちんかんに

松岡／聞こえなくなって困ったことは、子供の保護者会に行ったときです。ママ友との会話ですが、電車の中で話しかけられても答えることができなかった。初めての教室に入ったときに、保護者が自己紹介をしていくんですけども、初めての場所で緊張しているうちに、他の方が自己紹介でどんな内容を話されているのかが分からない。自分だけ余計なことをしゃべっているんじゃないかとか、話していなかったんじゃないかということもあって、いつも名前とよろしく願いますだけで終わってしまいましたね。しばらくして、補聴



器をして静かなところでは会話ができたので、私は補聴器をつけているんですけど、親しくなった方には話をして、静かなところでお話ができるようになったんです。それからしばらくして、今度は聴力が落ちてきたら電話がとれないんです。いきなり電話で相手の方の名前を言われても「杉本です」と言われても、本当は「住本さん」。それを私が取り次ぐと、怒られるんです。「杉本さんじゃないじゃないか。住本さんじゃないか」という感じで怒られて、話が頓珍漢になるんですよね。それで困ります。

本当に大事な時に聞こえないということがやっぱりつらい

山口／私の聞こえは人工内耳を付ける前は 120 デシベルでスケールアウト。普通のところでは聞こえない。完全に聞こえないということですね。人工内耳をした結果、語音明瞭度は最近の検査では 85%。今日の会議もほとんど要約筆記を見なくてもループがあれば聞こえる。非常にありがたいです。

人工内耳をして 20 年ですけれども、その前の 40 年間は全く聞こえなかったわけです。職場は筆談、家庭でも筆談。筆談だけなんです。松岡さんがおっしゃったように、子供が小さい時、子供の言っておることが分からないんですね。妻がいつも筆談している訳で、それを見て、何か手を動かす格好をすれば伝わるんだと思って、紙の上で書く真似をするんです。まだ二つか三つだけけれども、やっぱり何か伝えたい、一生懸命になって妻の書く真似をするんです。それを見ると親としては本当につらい。

それから、本当につらいのは大事な、本当に大事な時に聞こえないということですね。情報保障も得られない。結婚式の時に今は要約筆記をつける人もあるんですけれども、仲間から新郎は黙って立っていたらそれでいいんだということで、励まされたんですけれども、自分の結婚式なのに早く終われ早く終われと思っていました。まったく何も分からないんですから、じっと座っているだけですから、早く終わってくれと。妻のお母さんはどう思っていたか後で聞いたんですけれども、聞こえない人と結婚すると娘が不幸になる。今なら間に合う、今なら断れると結婚式が終わるまで思っていたそうです。これは親としてはそうだろうと。本当に大事な時に聞こえないということがやっぱりつらいですよね。

大変つらいのは、母の終末期。母が一生懸命何か言いたいことを言っているんですけれども、全く分からない。動物でもお互いに意思が通じるのに本当に情けない気持ちですね。手をしっかり握ってくる。死期が近づいているんだということは分かるんだけど、その手を振りほどいて、その場所から逃げてしまったということが、今でも非常につらい記憶として残っています。

それからこれはユーモアに入るんですけれども、職場の時代には昔の話で、モーレツ主義とかいうのが流行った時代で、徹夜で何回も仕事をやる。今日は徹夜だということでやるようなときもあった。結婚して以来、今日は遅くなる、今日は帰れないということを妻に一度も電話したことがない。これもよく辛抱してくれたものだと思うんですけれども、聞こえない人の避けられない実態でしょうね。そういうことがありました。

コミュニケーションの工夫について

滝野／ありがとうございました。本当は語りたいことがたくさんあるかと思うのですが、氷山の一角を紹介していただきました。続きまして、「コミュニケーションの工夫」について、お願いいたします。

複数のコミュニケーション手段を使うこと

岡本／コミュニケーションの工夫ということで、学生時代 FM マイクを使っていたというのをお話ししました。FM マイクは、私の時は教育のためなら FM マイクは補助で出せますということで、補聴器と同じように FM マイクの購入の申請をして使っていました。

ただ、社会人になると、社会は教育のためではないので、FM マイクの補助は出せませんと、役場から言われたことがありました。やはり補聴器ではどうしても限界があることはその時にも分かっていました。どうしても FM マイクは必要だということを役場の人に理解していただくため、補聴器の業者の方と相談をして、本来、耳の検査は防音室で実施することになっておりますので、全く騒音のない環境で測定した結果が聴力であったり、語音明瞭度であったりということなので、騒音下での検査もしてもらい、騒音何デシベルの時にはこういう結果、というふうに 20 デシベルの騒音、40 デシベルの騒音という環境を作って、補聴器の効果であったり、FM システムを使った時の効果であったりを数値化して、その資料を役場に提出しました。普段の生活では、どこにでも騒音は溢れているので、FM を使ったらこのように聞き取りがよくなるということを客観的に分かるように、役場の人に説得をしまして、役場の方も「分かりました。京都府と掛け合ってみます。」と、役場の方も頑張って努力していただいた結果、社会人として FM システムの購入補助を認められるようになりました。

私はこちらの法人に勤めており、手話であったり、要約筆記であったり、ループを使って仕事をしているので、職場で FM システムを使うのはあまりないのですが、プライベートのところで大事な話があるとか、そういったところでは FM システムを持ち出して会話したりしています。FM システムでも聞き取りにくいこともあります。聞き慣れない単語を聞くと「えっ」ってなりますよね。聞きなれた言葉は頭にイメージができるので分かるのですが、初めて聞く単語になると「もう一回言ってください」「すみません書いてください」になりますので、そういった時には筆談、FM システム、補聴器、口を読んだりするなど、複数のコミュニケーション手段を使って、コミュニケーションの工夫、情報保障の工夫をしています。健聴者のように 100%までは難しい、一つのコミュニケーション手段であつたら 100%は届かないですけれども、複数のコミュニケーション手段を使うことで、限りなく 100%に近づけるというような工夫をしています。

聴覚障害を「見える化」して、周りの理解やサポートを得る

西岡／私自身勤めをしておりますので、周りは健聴者ばかりです。私一人が難聴者ということで、職場におけるコミュニケーションの工夫ということでご紹介させていただきたいと思います。お手元の資料にお伝えしたいことを載せていますので、また見ていただきたいのですが、パワーポイントでも映してまいります。(資料参照)

3、4年くらい前からなんですけれども、難聴の進行によりまして、自分自身の自助努力だけではどうにもいかなくなりました。パネラーの皆さまは、私以上に聴力が悪いにも関わらずコミュニケーションの壁を乗り越えられている。私自身は壁にぶち当たっているところで、それを乗り越えるためには周りの協力、サポートが必要不可欠になってきます。どういったふうにして

協力を得るのかというところで、いろいろと悩むところなんですけれども、聴覚障害は見えないと言われますね。見えなさを「見える化」するということで、周りの理解につなげて、周りのサポートを借りるということを頑張っているところがございます。

まず一点目、見えないという部分ですね。聴覚障害は見えないということに対して、「障害があるなんて見た目には全く見えないよね」とか、「健聴者と変わらない」「補聴器をしているなんて知らなかった」と言われます。これに対しまして「視覚化」ということで、会社に持って行くカバン、筆箱には耳マークを付けて、私は耳が不自由なんですと、ある意味同情を引くようで嫌な部分もあったんですけれども、人の手を借りるためには仕方ないということをやっています。

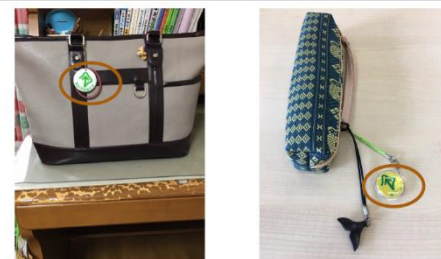
工夫のその二です。半年ほど前に補聴器を買い替えたんですけれども、以前は RIC 型ということで、レシーバー・インザ・カシヤックということで、あまり見えないんですね。それを買い替えるときに耳掛け型に変えました。プラスイヤホンをつけることで、1対1で話しているときに私が「えっ、えっ」と聞き直すと、すぐに耳が不自由だと分かってくれるというのがある。そういった職場で過ごしているという状態です。

次に、感音性難聴は分からないとよく言われます。「普通にしゃべっているのに耳が不自由なの？」とか、「補聴器をしていたら聞こえるんでしょう」とか、「1対1のコミュニケーションは大丈夫なのに、会議・打ち合わせ・懇親会などでは何で聞こえないの?」「補聴器を外していたらきつかったでしょう」等、そういった周りの疑問には、自分の障害並びに聴覚障害の特徴への対応を説明したり、分かっていたく努力をするということなんです。

分かっていたく工夫その1ということで、「補聴器をしていたら普通に聞こえるんでしょう」という部分ですね。岡本さんが聞き分けの話をされましたが、私はこうゆう格好で説明させていただきます。分かりやすく以前読んだ漫画の一コマを活用させていただいて説明しています。感音性難聴って何?聞こえる聞こえないというのは分かる。聞き分けできる・聞き分けできないっていうのが分からない。音が歪む、響くっていうのは我々に経験できないよねっていったところに、漫画「寂しいのはあんただけじゃない」という漫画の一コマなんですけれど、「明日の天気どうですか?」と、感音性難聴にはこんなふう

視覚化の工夫 その1

➤ 鞆・筆箱には、耳マーク!
➤ 私は、「目が不自由です」ということを目で見るようにする。



こえているんですよと、目で見て分かっていただく。「明日・天気、どう・か」っていう部分は分かる。それ以外の部分は「ふにゃふにゃ」という感じで分からないんですよ。こういったことを目で見て分かってもらうというような努力をしています。感音性難聴のコミュニケーションの不完全さを理解してもらい、補聴器は音を大きくしてくれるが、歪みを補正するのは難しいんですよということを、断片的な理解であって、全体的な理解ができていないんですよということで説明しています。

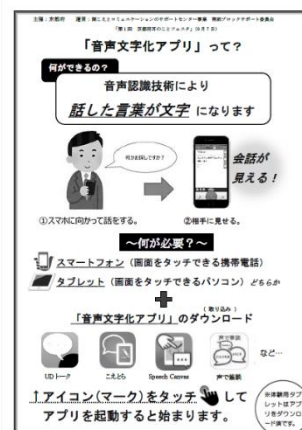
続いて分かっていただきたいことその2です。私の部署には11名程度の同僚がいます。人となりですべての方に分かってもらうのは難しいということで、自己紹介のツール、リレーコラムというのがありまして、そこで私の紹介、仕事がしやすいようにサポートいただきたいことを部内に発信しました。非常にためらいがありました。全ての方にカミングアウトすることに対してためらいがありました。しかしながら、今の状態を考えるとやらなければならないということで、非常に大きな決断でありました。投稿した後に、コミュニケーションに配慮する旨の回答を得られて、やってよかったなあと思っております。

現在職場でお願いしていることは、大人数の会議は聞き分けが困難なので、全て出席する必要はなく、自己完結型の業務を中心に付与してもらっている。会議でも、発言者の方には、補聴援助システムロジャーマイクを持って発言してもらおう。議論となった場合は、マイクを待っておられない方もしゃべられるので、パソコンでノートテイクをお願いする。会社の人事部門にお願いをしまして、聴覚障害者用の情報保障をお願いする。これは3年前にお願いしたのですが、やっとこの間、9月から音声文字変換ツールというのが採用されました。非常に私にとってはうれしいことです。懇親会は聞き分けが難しいですよ。そういったところに対しては、私の障害を理解しているグループの懇親会だけ出席しています。それ以外は参加を見合わせています。参加しても、言っている中身は分かりません。飲んで、食べて、温泉に頑張っているところです。

聴覚障害によって、自助努力でできること、できないことっていうのは難しいんですけども、きちんと見極めたうえで、できないことに対しては冷静に自分自身認めて、周りのサポートを借りるということを頑張っているということです。徐々にではあるんですけども周りの理解は得られているのかなと自分では思っています。実は先日うれしいことがありまして、ノートテイクしていただいている方、いつも特定の方だったんですね。それがちょうど私の娘くらいの年齢の女性の方が「私もノートテイクするよ」と言ってくれたんです。とてもうれしかった。コミュニケーションできるっていうのが非常にうれしいですよ。

堂々と自分が難聴やと言うこと

牧野／私は難聴と分かってから補聴器をつけました。はじめ片耳で、もっと進んで両耳に補聴器をかけました。それでも音声は聞こえても言葉が分からないというので、宇治の手話の勉強会に行きました。そこで人工内耳の人を見て、私も人工内耳の手術をしました。それで1対1のお話は大丈夫です。でも大勢の中での会話は分かりません。距離が離れて



の会話も分かりません。そして、もちろん私の大好きな音楽はだめです。自分で自分をほめてやりたいというのは、私はどこに行っても「私、耳が悪いのよ」ということは言っています。それでも大勢の人の前では言ったことはありませんでした。

3年ほど前に古稀の同窓会がありました。年が分かりますね。中学を卒業して、もう何十年も会ったことのない人ばかりです。そこに行きました。私は音楽の登紀ちゃんに通っていました。だから、みんなの前でお話しをして、そしてまた校歌を歌ってと言われました。

「私は耳が悪くなって、補聴器と人工内耳をしています。昔は歌が上手やったけど、今私が歌ったら音痴です。」と、みんなの前でそのことが言えました。なぜこんなことを言うかという、難聴者は自分が難聴だということを言えない人が多いんです。でも自分が難聴やということを言わなかったら、それから先のことは開けてきません。だから堂々と自分が難聴やということを言ってください。言って、自分の心も、相手も「そうなんや。そしたらこうしてあげたほうがいいな」っていう、その思いを増やしていきたい。そういうふうに思っております。この会合では、人工内耳とループでほぼ分かります。

カミングアウトすること、手話で話すこと

松岡／先の3名の方がおっしゃった「カミングアウト」、非常に難しいと思うんです。私も30代で補聴器をつけ始めましたが、その頃はヘアスタイルを変えて、耳を隠す、補聴器を隠すということをやっていました。親しくなっても、自分が難聴であることを話すことができなかつたです。

でも、手話の勉強を始めました。このセンターで同じ難聴者の方と出会って、隠さなくてもここに来れば話ができるので、とても気持ちが安らかになりました。それをセンターに来れば「書いて」ということが気楽に言えるんです。それが家に帰っても言えるようになりました。そしてそれを積み重ねることによって、外でも「書いて」「聞こえないの」「分からないの」と言えることができるようになったのはつい最近です。

先日も私事ですが、入院をしました。でも最初にコミュニケーションに困りました。病院の方々にも最初に私は聞こえません。要約筆記の方もいつもはいてくださらないので、私自身が何とかしないと、病院の看護師さんとか、お医者さんとのコミュニケーションが取れないので、いろいろ考えて、とにかく「私は耳が不自由です。書いてください」ということを、来て下さるかたに分かるように大きく書いて貼りだしました。結果、入院の最後の方になるとナースの方が積極的に書いてくださるようになったんです。

カミングアウトするということはすごい大事だと思います。同障の方、聞こえない方といっぱい話をしてください。そうすれば自然に自分で自分の病気のことを、その病気を知らない人に言えるようになってくると思います。

そのほかに、コミュニケーションの工夫ですが、機械はいっぱいあります。スマホも使えますし、UDトークとか機械はいっぱいあります。それを使うこともできます。でも最初の岡本さんのように電池がない、機械がない、どうしようというときに手話は便利です。ただ、手話は通じる人が限られてくるので、誰とでも手話で話すことはできないですけど、少しずつ、指文字だけでもいいんです。「あいうえお」だけでもいいんです。覚えたら、紙や道具がなくても、お話しすることができます。少しずつでいいんです。手話を覚えて

ほしいと思います。私も手話を覚えようとしたきっかけは家族としゃべりたいからです。家族と話しする時に、いちいち紙がない、鉛筆がないというふうにしなくても、家族の間だけで通じる手話でもいいから、コミュニケーションできます。今は私の娘も少しずつですが覚えてくれたので、娘とは書いたりもしますけれども、とっさの時は手話で話をしてくれます。いろいろたくさんの方がいますので、それぞれの短所・長所を使い分けて前を向いていきましょう。

難聴や聞こえないということをマイナス評価する社会を変える

山口／会社の中など営利関係のある場合と、そういうものがない家庭とか学校の同窓会などでは違うと思いますが、職場では私は耳が聞こえないということは、定年になるまで言わなかった。近くの人には知っていると思うのですが、同じ部内でも30年間一緒に仕事をしている人が定年の時になって「えっ、聞こえなかったの」と言われたことがあって、聞こえる・聞こえないということがそんなに差がないというのが実態だと思うんです。

例えば、会議に出ないという選択もあるんですが、私の職場の場合には、会議に出ないということをやると、だんだんと情報を狭めていくとか、自分の場所を失っていく、自分のやるところが少なくなっていく気がして、会議には出てました。こんな会議出なくてもいいんじゃないかという場合も出てました。会議に出ると資料が手に入りますし、隣の人のメモを見せてもらうとか、主体的な参加ではないのですが、自分の力の範囲を確保しているという利己的な理由で出ていました。

ここで思うのは、西岡さんのおっしゃるように自分が難聴だということで、遠慮するようないところのない西岡さんのやり方は良いと思うんですね。今は、社会が難聴や聞こえないということをマイナス評価するところをなくしたいと思っています。これをなくしないと、会社で自分は聞こえませんということが言えない。人事考課というのがあるんですけども、公務員にはないかもしれないですが、耳の聞こえないことに対して不利なことがたくさんあるんですね。そういうこともあって、自分は最後まで耳が聞こえないということを会社では公表しなかった。隠しもしなかったけれども、公表もしなかった。それで、会議の時は資料があつたり、メモを見たり、後で聞いたりすることでカバーはできると思うんですが、人間関係の中で、飲み会とかアフターファイブですね、自分が場所を壊すのではないかと気兼ねがあつて、それも行かないとだんだん人間関係を狭めるのですから、本当は行かないといけないんですが、私はその場所でも筆談できる人と飲みに行ったんだけど、たいてい飲み屋では筆談をやっていました。

家庭では、今は人工内耳をやってメモもいらなくなったのですが、人工内耳というのは効果が大きいですが、脳の働きは大事だと思うんですね。聞こえないということは有毛細胞がだめになっていくんだということが一つの原因ですけれども、ここは回復しない。脳は100億の細胞があると言われて、年が行けばだんだん減っていく。減っていくけれども、他の細胞がそれに代わった役割を果たすと言われていています。だからリハビリは非常に大事だ。ヒアリンググループを使ったり、人工内耳もフルに活用して、いろいろな場所で聞くという形を取っていきたい。

今、文字電話、字幕電話が始まっているので、私も使いかけたのだけれども、難聴者の

方は電話を使わない習慣があります。電話ではなくメールをするというのが一つあるんですが、これからは電話も積極的に活用して、電話も便利なものですので、使っていくのも大事じゃないかなと思います。

滝野／ありがとうございました。これで前半のパネラーの皆さんのお話が終わったわけですが、これからは電話も積極的に活用して、電話も便利なものですので、使っていくのも大事じゃないかなと思います。

【フロアからの質問】

聞き取りや、語音明瞭度の訓練をする場所がありますか

参加者／岡本さんにお伺いしたいことがあります。私も障害者手帳3級で、大人になってからの完全な中途失聴です。右耳が約90デシベル、左耳が95～100デシベルくらいで、聴力としてはおそらく岡本さんと同じだと思います。ただ語音明瞭度は左耳がゼロに近く、右耳が35%しかありません。必死で聞いて、必死で口を見て会話を何とかしている状態なんですが、正直初めて会った方、特別口の動きに気をつけてくださっていない方もあり、ほぼ、全く分かりません。聞き取ることがほぼできない。

岡本さんが先ほど、子供の時から耳が悪かったんで、聞き取る訓練や話の訓練をされた結果、80%の語音明瞭度で聞き取ることができているのではないかというお話がありました。語音明瞭度は訓練をすれば上がるものなのではないでしょうか。訓練を受ける場所も正直大人にはないです。大人になってから聞こえなくなったものは、口の形を読み取る、聞き取りの訓練をする、発生の訓練をする、そういう施設すらないのが現状で、私も、発音がどんどん悪くなっていくので、どうすればいいのか分かりません。聞き取り、語音明瞭度の訓練をする場所があれば受けたいので、どういうふうにして聞き取りの訓練を受けられたか、語音明瞭度は訓練をすれば上がるものなのかを教えてくださいたいと思います。

いろんなコミュニケーション手段の活用を

岡本／岡本です。ご質問いただきありがとうございます。

確かに今お話しいただいたように、聴力のデシベル、私と同じデシベルということのようなんですけれども、語音明瞭度が私のほうがよい結果で、こちらの方は大分悪いというようなんですけれども、私も訓練を受けたときがもう小さい頃なので、私自身もはっきりと覚えているわけではないんですけれども、語音明瞭度が訓練によって改善されたということではないんだと思います。私は元々語音明瞭度が悪かったと、今の数値のまま決まっていたんだと、訓練を受けたからといって、これが上がっていく、劇的に回復するというのではなくて、私の場合は経験の積み重ねといいますか、話している人の文の前後を推測したりとかで、明瞭



度が足りない部分を補っているような、山口さんも今お話しされていたんですけれども、他の機能、頭の中でいろいろ推理したり、推測したりしてそういう文だと自分で補って聞き取りをやっているんですけれども、聞き取りの機能が改善するのは、私もいろんな難聴者の方に出会っていますが、回復したという事例は聞いたことがないのです。ただ、私も今、語音明瞭度がいいですけれども、もしかしたらどんどん落ちていくかもしれないですし、私も未来のことは分からないし、皆さん同じですけれども、分からないので、一つのコミュニケーションにこだわるのではなくて、やはり自身のできないことはできないというふうに割り切ってしまうと、できないのであれば他のコミュニケーションでそれを補っていきこうというふうに、早めに気持ちを切り替えて、ご自身のコミュニケーション手段を広げていって、コミュニケーションの豊かさを育てる、形成していただければいいのではないかなと思います。

私自身も25歳までは補聴器と唇の動きだけにこだわってました。その二つだけで聞こえる人の世界でやっていたら、25歳まで必死にもがいてきましたけれども、やっぱり限界がある。このままではあかんというふうになって、ここと同じ法人、京都市にある聴言センターに駆け込んで、自分のモヤモヤした思いを全部吐き出して、そこから相談員の方に手話もあるよ、要約筆記もあるよと、いろんなコミュニケーション手段を教えてくださいました。当時私も、薫をもすがる思いだったので、参加していろんなコミュニケーション手段があることに目が覚めたという言い方ですかね。そのお陰でコミュニケーション手段が手話であったり補聴器と口話はもちろん、筆談も積極的に使ったり、今はスマートフォンがありますね。スマートフォンでもアプリケーションの中に音声認識のアプリケーションがあります。それも使ってコミュニケーションのいろんな方法でやっております。ぜひいろんなコミュニケーション手段を活用していただけたらと思います。

難聴者にとっての社会参加とは

滝野／皆さんのお手元の資料に、「要約筆記や福祉制度との出会い」「難聴者協会との出会い」「参加された方へのメッセージ」の項目があります。社会参加する立ち位置からとらえていただき、自分にとっての社会参加などの体験や思いをそれぞれ語っていただければと思います。順番はやっぱり若い人からということで、よろしくお願いします。

福祉制度の活用は待つのではなく自分から動くことが大事

岡本／「要約筆記や福祉制度との出会い」「難聴者協会との出会い」あたりのお話をします。私は生まれたときから障害者手帳を申請していましたが、基本的に学生時代までは親任せだったんですね。親が全部手続きをしている、小さい時からの難聴者というのは皆さん同じようなことだと思います。大学生の頃から自分でやってみなさいということで、大学生から私一人で役場に行きました。そこで身体障害者手帳が更新制でないが故に、大学生の時に小3、4年頃の写真が手帳に貼ってあって、これ全然違うよねってことで、手帳を紛失したという形で写真を変える手続きを自分でやったのが、ちょうど大学生のころ頃なんです。その時初めて手帳の手続きってこうやるんだということを学ぶことができま

した。

そのあと自分の障害については自分で手続きをするようになりました。要約筆記を利用したのも最近なんですね。ちょうど7、8年前に、それまで補聴器と口話だったのが限界にきて、要約筆記を利用しています。

やはり、障害者全般に言えるのかなと思うんですが、障害にならないとこのような制度があるということを知ることになかなかたろうし、福祉制度も自分自身で情報を得ていかなければならないと、改めて思ったところがあります。福祉制度も、社会情勢が変わるに連れて変わる部分がありますね。そういったことに自分から情報を得る。待ってでは得られない情報が多いので、自分から情報を取って、自分から手続きしていく、自分から動いていくというのが社会参加する上では、大事なことなんじゃないかなと思っております。

難聴者協会との出会いも、同じように25歳頃なんですね。当初は難聴者協会は何をするんだろうなと思って、活動に参加して難聴者協会を知ることになりました。そして行事の参加を通じて、難聴者運動とはこういうものなのかということを知ることができました。やっぱり私と同じように、一人ぼっちの難聴者をなくしたいという思いも合致しますし、やはり難聴者特有の悩みは、お互いに難聴者同士しか分かり合えないというところもあります。まだまだ社会の中には、このような行事に参加されていない難聴者もたくさんおられると思います。そういった方々を一人でも多く、人生バラ色というわけではないんですが、豊かにするためにも行事にご参加いただいて、私たちの仲間の輪を広げていきたいなと考えております。

さらに社会参加するためには、私たちの活動だけでは限界があると思っております。聴覚障害の入り口はどうしても耳鼻科になりますよね。耳鼻科のお医者さんであったり、補聴器業者の方々がどうしても私たちの入り口。聴力検査という入り口が耳鼻科・補聴器の業者でとなりますよね。その方たちと関りを持って、共に活動していくのが今後大事なことなんじゃないかと思っております。もちろん行政の方々の協力もいただいて、一人でも多くの難聴者が、明るく・楽しく・話のできる行事に参加していただくことで、私たち難聴者の思いや、悩みを社会に広めていって、ゆくゆくはどこでも、誰とでも、聴覚障害というバリアのない社会にしていきたいなと思っております。



社会参加に導いてくれたのは、中途失聴者、難聴者との出会い

西岡／社会参加という意味では、自分が今まで経験した中で、行きつく先というのは聴覚障害というのは、先ほど「分からない障害」と言いましたが、人間関係を作るコミュニケーションに障害があります。そういったところに障害があるということは、対人関係の悩みがどうしても大きくなってしまおうと思います。皆さんもそう思っておられると思います。私も対人関係ですっと悩んできまして、疎外感とか、孤立感とかいった部分で、精神的な危機というところでも、現実逃避といえますか、家にずっとおったほうがいい、会社に行きたくないと思ったことがあって、今日妻も来ているんですが、妻に泣きついたこともあります。でも社会参加するように持って行ってくれたのは、中途失聴の方、難聴者との出会いじゃないのかなと思っています。そこは心温まる場であって、全部までいわずに、「そうそう、分かる分かる、すごく分かるよ」というのが、仲間と語り合う、そこからまた頑張って会社に行こうというふうになるんじゃないかなと思います。

もし同障の集まりに参加されていない方があれば、ぜひとも参加していただいて、お配りしている資料にも書かせてもらっているんですけども、前に向いて生きていける存在、そういう集まりの場だと、僕は思っています。私が最初に参加させてもらったのは、8年ほど前です。東日本大震災の翌々日に「かものはし」という集まりが、中等度の難聴者の集まりですけども、そこに初めて参加させてもらって、今まで溜まっていたものがザーッと吐き出したのを今でも思い出します。そのことによって心がスーッと軽くなった気がしました。聴覚が落ちていくレベル・レベルによって、いろいろ悩みは違ってきます。軽い時は、先ほど松岡さんがおっしゃっておられたように、私は男ですけども、補聴器を隠して分からないようにしたりとか、あいまいな対応で曖昧に笑ったりとか、曖昧に返事してしまったりとか、曖昧にうなづいたりとか、相槌を打ったりとか、そういったことで自己嫌悪に陥ったりとかがありました。後は、先ほどの対人関係ではないですけども、向こうでこっち向いて話されてて、ニコニコッと笑われたら悪口言われてるなと思ったりとか、そのようなことは、聴覚障害者であるが故に避けられないと思っています。そうしたことも同障者の集まりに参加することによって、温かい言葉とか、「分かる分かる」という分かり合い、「あるある話」をして、心温まったところで、前に向かって歩けるんじゃないかなと、私は思っております。

ですから、社会参加というテーマからすると、ぜひとも同障者の集まり、中途失聴者の集まり、難聴者の集まりに、参加していただくのが大事なんじゃないかなと思います。

難聴者協会、要約筆記、人工内耳の三つに出会って、私の世界は広がった

牧野／7年前にそばでしゃべる主人との会話も分からなくなり、二人で難聴者のための手話の勉強会。これが宇治にあることをお聞きしてそこに入りました。そこで要約筆記の方と初めて出会いました。そしてまた人工内耳をしてはる難聴者の方を同時に見ました。難聴者協会、要約筆記、人工内耳、私にとってそれが同時なんですね。そのことで私の今までの人生が、耳が悪くなって、やりたいことが何もできなくなって、これからの私どうしたらいいんだろうって思っているときに、難聴者協会、要約筆記、人工内耳の三つに出会

って、私の世界は今までと違う世界が広がっていきました。難聴者は自分ひとり、自分が聞こえなくなったから、他の人に迷惑を掛けているんじゃないかという思いがあって、話しかけられるのがこわくて家から外に出なくなる。無口になる。しゃべるのが怖いんです。そういう状態から今の三つに出会って、私の世界が広がりました。

4年半前に宇治の難聴者協会の役員になりました。いろいろなところに出て、いろいろな話を聞き、障害者の団体、サークルの会合にも出させてもらうようになりました。

でも大きな会議が一番嫌いなんです。今日は難聴者のための会合ですから、要約筆記が付きます。でも、障害者団体と言ってもいろいろな障害の人がいます。障害を持った人をお世話しているサークルの代表の人等。だから要約筆記のスクリーンはつかないんです。ノートテイクが付きます。でも大勢ですので遠くで話されている方の話は何もわかりません。早口です。資料を次々配り、いわはるんですけれども、資料を探すだけで時間が経っちゃう。資料を探したころには次のことに行っている。もう、そういうことで、大きな会合、難聴者だけでない会合というのが一番嫌いです。そして、いろいろな意見を言っておられて、「はいどうですか？」と言われるんです。その都度言います。「私は難聴者です。皆さんのお話は何も分かりません。書いてくださっているのを読んで理解してからでないと、私は言えません。」その都度言います。でも次の時行ったらまた同じことです。だから思います。もう仕方ないなってあきらめてしまったらそれまでです。そういう場に立った時、何度も何度も、その都度言い続けていくことが必要だってことを感じました。

今ここの聴覚言語障害センターは、4・5年前にできました。はじめからここで自立訓練を受けています。難聴者が社会参加できるための自立訓練です。そこで手話とパソコンを勉強しています。その手話の訓練の人たちとは皆さん仲良しです。本当にすごく仲がいいんです。嬉しいんです。すごく賢い人がいっぱいいるんです、

難聴者に。あー、難聴者、素晴らしい人がいっぱいいるな。この素晴らしい人を難聴であるが故に社会参加させないということは、社会の損だ。自分の損だけではない。社会の損だ。そういうふうに思いました。だから難聴者は行くところ行くところで声を上げていかないと駄目。声を上げないと私たちはしゃべるから、みんな分かっている、向こうが分かっていると思ってしまうんです。私は聞こえませんがということを堂々と胸を張って言う。社会に参加するためにどうしたらいいか。手話は便利です。難聴者は高齢になった人が多いんですね。だから、もう今更手話は難しいと言ってしない人が多いんです。でもちょっとでも手話を勉強したら、本当にすごく便利ですよ。分かりあえるんです。手話が分からなくても、身振り・手振り・顔の表現で本当に分かるんです。それとパソコン。私は宇治の難聴者協会の事務局長になったんです。難聴者協会に入って2年目に、パソコンも何にもできない私が事務局長。どうしたらいいの？そのため聴言センターで教えていただきました。お陰でまだまだですけども、普通の文章を打てるようにはなりました。難聴者にとって何が大切か。自分が難聴であることをきちんと自覚して、それをやっぱり訴える。自分はこうやったということを訴えることくらいではだめです。社会に出るためには何が重要か、それをやっぱり、自分で努力しないと駄目です。そういうことをやりながら、私はちょっとずつ努力してやっていきたいなと思います。

宇治には難聴の障害手帳を持っている難聴・中途失聴の方は700人ほどいるそうなんです。ところが、中途失聴・難聴者協会に入っている人は40人を切っているんです。そ

したら後の660人、どないしてんの。難聴者協会のことも知らない。要約筆記のことも知らない。家から外に出るのがもういややと、籠っている人が多いんです。その人たちに向かって、なんとか難聴者はあなた一人じゃないよ。みんな一緒に仲良くできるのよ。手話をちょっとでも覚えよう。そして外に出て、いろんなどこに社会見学に行こうと訴えていきたい。これは耳が悪くなったから分かったことなんです。耳が悪くならなかったら、今の私はまだコーラスをやっていました。それしか分からなかった。難聴になったお陰で、素晴らしい難聴者の方とお会いでき、いろんなこと挑戦できる自分になりました。そういうことをこれからの私は、生涯かけて訴え続けていきたいと思っています。

大切な話を聞く時は、要約筆記の派遣を依頼しよう

松岡／私が要約筆記と出会ったのは手話を学ぶための講座に参加したときです。家族と手話で話をしたい、その一心のために手話の講座に参加しました。その講座は健聴者、聞こえる方たちが手話を学ぶための講座だったんです。だから、難聴者は私一人しかいなかったんですが、一から丁寧に教えていただきました。その時も、講座があったんですけども、講座の内容はもちろん聞き取れないので、要約筆記の方を講座の主催者の方が準備してくださっていて私の横について、一から十まで講座の内容を書きいただきました。

その後要約筆記を利用することはほとんどなかったんですけども、入院の時に長々とした説明をドクターに書いていただくのは申し訳ないということで、私から要約筆記を相楽センターにお願いし、要約筆記の方に来ていただきました。最初入院した病院とは別の病院に行ったところ、そこでは家族と二人だけで行ったんですが、私が聞こえにくいんですと言ったら、ドクターは私の方を見ないで付き添いの娘の方を向いて、ぺらぺらぺらとしゃべり出したんです。患者は私なので私に説明をしてほしいんですけども、書いてもくれなかったし、目を合わすこともなかったんです。娘に説明して「はい終わり」。「入院しますか、手術しますか」っていう感じで、いきなり決断を迫ってくるんですね。ちょっと待ってくださいという感じで、それでその病院はお断りしました。

それをセンターの方に相談したら、家族とは別に要約筆記の方が必要だよ。家族は聞くだけにして、書くことは別の方が書いてくれたほうが分かりやすいよってことを教えていただき、別の病院に行って、家族と私と要約筆記の方と3人で行って、先生の説明を受けて、入院を決めたという次第です。もし本日の参加者の中で、大切な話を聞きたいと思った方は、要約筆記の方をお願いするのがいいかなと思います。

それから、手話との出会いは、資料の中にも入っていますが、センターでの自立訓練、月曜から金曜まであるんですが、センターのパンフレットの写真、隅っこに映っているの私なんです。これは5年前に、ここが出来上がったときに撮られた写真だと思うんですが、このメンバー、今も続いています。訓練は2年で終わるんですけども、卒業の後「ひなどり」というサークルを立上げてまして、ほそぼそ、ここにおられる方何名かと手話の勉強をしています。すぐに手話は使いこなせませんが便利です。

身体障害者手帳を申し込みましたが、私が大切だと思ったのは、年金です。障害者年金。障害者手帳と障害者年金というのがあるんですが、私も65才になるので、年金の手続きをしようと思って行ったら、「あなた障害者年金もらえるんじゃないか」と、一回考えてみ

たらと初めてそこで言われたので、本当だったら障害者手帳を認定された時に、すぐに年金の手続きをすれば認められたかも分からないんですけども、過去の分は取り戻すことができなくて、申請してからの分の障害者年金をいただいています。難聴者協会は木津川市の会長にお話を聞き、相楽の難聴者協会に入っているんですけども、木津川市でまだまだ活動ができていなくて、これから会員をもっと増やしていこうねっていう話をしています。受付に黄色い紙を置かしていただきました。相楽のほうの方で難聴者協会に入ってもいいな、お話を聞きたいなっていう方があれば声をかけてください。

難聴を、個人の問題ではなく、たくさんの人々の問題として取り組む

山口／私は難聴者協会や難聴者とのふれあい、出会いというよりも協会とか、要約筆記制度を作っていくのに深くかかわってきました。職場が大阪の中之島の近くにありました。その関係で耳が聞こえなくなった時に、読話、手話というところまでは気が付かなくて、読話をマスターできないかって思ったわけです。

そこで生野のろう学校へ訪ねて行って、初めて「新光会」という難聴者の親睦団体があって、ここで読話の練習をやってますということを知りまして、そこが初めて難聴者とのふれあいと、そういうグループと会ったわけですね。60年前ですけども、難聴者の協会はなかったんです。身体障害者福祉法には障害者を定義して、身体障害者とは、肢体障害・ろうあ者・視覚障害であると、3つだけだったんです。その後障害者というものが広く考えられるようになって、今はいろいろな障害者が増えてきました。そういうときだったんですけども、初めて難聴者の方に会ったということは、なにか心の中にほっとするような、例えば同じような人と一緒だという安心感が生まれます。これは大事なことだと思うんですけども、ちょうどそのころ新光会の中でもお互いに慰めあったり、傷をなめあったりだけではなしに、要求団体としてやっていくべきだという動きが出てきたんです。

それは主に京都から、藤原さんという方とか兵庫県の林恭介さんというような、伝統的な方ですね、そういう方と巡り会って全国的な運動を進めていこうと運動を一緒にやっていきました。その時に調べたんですけども、難聴者が難聴者と触れ合ったり、団体に触れ合うのに、少なくとも5年とか10年かかかっている。ここが非常に問題だ。難聴者はばらばらの状況で、なかなかどこに行ってもいいのかわからない、自分の居場所が分からないというのは今も続いていると思うんですが、そういうことがあって、京都の場合はろうあ協会の運動は非常に民主的で進んでいたんですね。その影響をかなり受けたと思うんですけども、力を持った団体にしていこうということで難聴者協会がスタートしました。

その時に私も加わって一緒にやりました。例えば、宇治に難聴者協会を作ろうとしたときには、ここにいらっしゃる西村さんなどと一緒に障害者手帳の住所を市の方から、その当時はまだ個人情報がないので名簿を見せてもらって、個々の家を回って一緒にやりませんかという運動をやったわけです。今は何処に難聴者がおられるのか分からない。だから私たちの情報をどうやって届けるのかということが非常に重要な問題になってくると思うのです。

難聴者は先ほど活動しておられる方が非常に少ないと言われてきましたが、高齢化の社会で、どんどん高齢者は増えていくと思われまます。私たちの運動が始まったときには、300万

人難聴者のために頑張ろうというのがスローガンだったのです。その後国際大会などでは、カナダの大臣が発表したんですけれども、カナダは10%が難聴者であるという発言があったんですね。我々も国際的には10%と言っているから、日本には10%だろうと思っていたんですけれども、最近は高齢化が進んだせいもあって、20%とかいう話が出ています。10%としても人口の2000万人はおそらく、確実に難聴者なんですね。ということは全難聴に入っているのは3000人足らず。ということは、1万人の中で、一人前後の人が活動しているのに過ぎない。これはやっぱり難聴者の社会活動への参加が非常に遅れているせいだと思うんです。京都の場合は一桁違って、1000人に二人ぐらいが難聴者協会に入っているということですね。圧倒的に多数の人は、まだ難聴者と触れ合わず、引きこもりの状況にいる、認知症が心配だという状態にあります。私たちとしては最初、自分一人の問題として考えがちなんですけど、一般的にたくさんの方の問題として取り組んでいかなければいけないだろうと思います。

医学的基準による福祉制度を、生活の困難さ、不自由さに応じた仕組みに変える

山口／現在の福祉制度は、戦後の傷痍軍人の救済のために土台は作られたわけですね。それがその後、障害者の範囲もどんどん広がって、次々と修正される形で、今の状況になってきたと思うんですけれども、例えば、建物でもリフォームに限界がある。リフォーム、リフォームとしてきたために、根本的な矛盾が解決されるところが抜けているということですね。その一つが手帳の制度だと思います。

手帳の6級が福祉制度の恩恵が受けられるベースなんですけれども、6級にならない人と6級の人との差はほとんどないだろう。70デシベルと69デシベルの間で、福祉制度が利用できないような差があるのか？おそくないと思うんです。

私の場合は、磁気ループでほとんど聞こえるんですけれども2級です。2級であるけれども、生活の困難さから考えれば手帳を返してもよいくらいだなと本人は思っているんですけれども、手帳についてもそういう矛盾がありますね。

昔の制度の上に次々に何か手直しをしながら、今の状況になっているということで、後から活動し始めた団体は、福祉の恩恵が大変受けにくいと思うんですね。今の福祉の制度で、例えば、地域生活支援事業というものがありますが、これはデイサービスとか、ここにありますCS受信機の給付とか、ファックスの給付とか、これは地方自治体の責任でやりなさいということになっている事業です。

これは、地方の自治体が地方の特色を生かしてやりなさいと国が言っているんですけれども、予算が送られてこない訳ですよ。今の福祉団体を見ていると、以前からある団体、例えば日本身体障害者団体連合会、京都府身体障害者団体連合会、こういうところには専従職員を置けるぐらいの、いろんな補助金があるわけですよ。ところが後からできた難聴者協会に対しては、今のところ府からは10万円程度の補助金しかないんです。これはどうしてかというと、もともと予算が統合予算という形で送られてくるんだけど増えないから、今までいろいろ活動のために作ったものを切り捨てることはできないだろうということ、予算が増えない、切り捨てられない、新しい事業とかイベントには予算が付け

にくい、付けられないというのが現実ではないかと思うんです。この辺で福祉の制度を根本的に変えて、今のデシベル基準とか、医学的な基準と言っていますが、社会的な生活の困難さとか、不自由さに応じる形で、福祉の恩恵が届くような仕組みを考えないといけないんじゃないかと、個人的には思っています。近い将来、根本的に変えないことには、後から生まれてきた障害者の問題が解決できないんじゃないかなと思うんです。

滝野／ありがとうございました。社会参加に向けた課題を5人のパネラーから、具体的に述べていただきました。

ここでフロアの皆さんにお聞きします。皆さんにお聞きしますが、今日初めて参加されたという方、教えてください。はじめて、難聴の皆さんの話を聞いたという方は？手が上がっていますね。家族の方で、はじめて参加して、難聴者の話を聞いたという方が、一人、二人いらっしゃいます。遠慮なく質問してください。

【フロアからの質問】 **濁音を聞き取りやすくするヒントを聞きたい**

参加者／50音の話がされていましたね。「あかさたなはまやらわ」の50音の話。私は2回脳梗塞で倒れています。しゃべるのがうまくできませんけれども、50音で濁点のつく行がありますね。「が行、ざ行、だ行、ば行」濁点の付く言葉が聞き取りにくいです。しゃべりにくいです。そういう時の聞き取りに、何かヒントはないでしょうか？

【フロアからの質問】 **コミュニケーションが苦手な方の経験を聞きたい**

参加者／初めて参加しました。コミュニケーションについてですが、健聴者の方でもコミュニケーションが苦手な方はいらっしゃると思いますが、聞こえが難しい方も元々コミュニケーションが苦手な方もいらっしゃるかと思います、それで余計にそこを克服しようと頑張っておられる方もおられると思います。コミュニケーションが苦手な方のお話を伺えればと思います。

【フロアからの質問】 **人工内耳の効果と歌の楽しみ方を聞きたい**

参加者／今日初めて参加させていただきました。少しの人数での集いかなと思って参加したのですが、このようにたくさんの方がおいでだということは、耳の聞こえが悪い方がたくさんいらっしゃるということで驚いています。5名のパネラーの方がいろいろと今までのこととか、これからの社会参加についてお話しいただいたことは、自分がこれからどのようにしていったらいいのかということで勉強になったと思っています。まだ私は、聞こえが悪くなったのは2年くらい前のことなので、この先どうなるのかという不安がものすごくあります。5名の方の中に人工内耳を装着されたという方がおられたと思うのですが、

そうされたことによって、聞こえがよくなっている。私も病院の先生から勧められたことがあるんですけども、難聴になってからの期間も短いので、もう少し先に延ばしたいので承諾はしていないのですが、この先もし私が、このままの状態でなく、悪くなった時は人工内耳はしたほうがよろしいのでしょうか？された方にお聞きしたいのと、歌が好きな3番目の方は、歌が歌えない、ピアノも弾けないということでしたけれども、今も歌は完全にあきらめておられるのでしょうか？私も歌が好きなので聞きたいんです。歌いたいのですが、音だけでリズム感が全然分からなくなってしまったんで歌えないんです。そのことに対してはどのような対応をされているのか聞きたいと思います。

参加者／言語聴覚士さんがいらっしゃるので、当然分かっていることですがけれども、私がやっている方法です。「ばびぶげぼ」は口形で分かる。「ば行」と「ま行」だけが上の唇と下の唇がそのたびに引っ付きます。「まみむめも」「はひふへほ」口の形で分かると思います。

滝野／ありがとうございます。みんなで研究していきましょうということで、この場はこれで終わらせていただきます。二人目の質問がありました。コミュニケーションがもともと苦手な性格の方が難聴になったとき、しんどさがあるのではないかと、そういうお話でしたね。パネラーの方、何らかの答えをお願いします。

あらゆるコミュニケーション手段を活用して楽しむ

岡本／パネラーの皆さんの視線が全部私に向きましたので私の経験をお話しします。

コミュニケーションについては、難聴とか聴覚障害は関係なく、人間関係に関わるころなので、悩みというのはおそらく人生の長い目で見ても尽きることはないのかなと思います。私自身も学生時代、図書室にこもっていた経験談を先ほどお話ししました。その時、確かに私自身も話していて何べんも聞き返すし、「なんて、もう一回言って」を繰り返し言うと、相手はどんどんいやな顔になることもありました。そうした経験の積み重ねで、もう聞き返したら空気が悪くなるから適当にうなずいておこうと、曖昧なままでいいや、とりあえず空気を壊さずに、平和に過ごしていこうというふうな考え方になったんです。そうしたらその考え方ってちょっと寂しいというか、虚しいと言いますか、全然楽しくないですよね。でも、聞き返すと向こうも嫌になるのも当然だと思いますので、別の方法で相手に伝えてみよう、別の方法で相手の声を聞いてみようという工夫しました。人と話すっていうことは、どうしても音声言語が中心になると思います。音声を、耳で聞いて、また音声を出して耳で聞いてというのは、聞こえる人の中にもおそらく限界というものがあると思います。そこで音声言語という固定概念を一回捨ててしまっ、別の手段で伝えてみよう、別の手段で聞いてみようという柔軟な発想でコミュニケーションそのものを楽しむようにしていくことが、障害があるなしにかかわらず、コミュニケーションを豊かにする上では大事なことではないかと思うようになりました。ぜひ音声言語以外でのコミュニケーション、筆談でもいいですし、今はスマートフォンという便利な機器もありますので、スマートフォンを使って文字に変換してコミュニケーションをとる。機器だけでなく、日本人

は遠慮深いといわれますけれども、これも取っ払って、身振り・手振り・表情を使って、時には冗談も言って、楽しくコミュニケーションをしていこうというふうな気持ちになっていただいたらよいのではないかなと思います。答えになっているか分かりませんが以上です。

滝野／ありがとうございます。質問の意図に添っていましたでしょうか？
続きまして、人工内耳を勧められたが、選択に関わる問いかけがありました。牧野さんと山口さんのお二人に体験からのアドバイスをお願いします。

「人工内耳の効果は人それぞれ」「音楽は嫌いではないけど楽しくない」

牧野／私は66歳の時に人工内耳をしました。本当に経過がよく、1対1のお話は、ほぼ完全にできます。今日の話もヒアリンググループ、左はそれをしてしています。ほぼ分かります。ところが人工内耳は誰でも全部聞こえるようになるのではないわけです。聞こえがあまりよくないという人もあります。私や山口さんは本当に良かったと思っています。私の場合は、会話が全く分からなくなって、お医者さんは悪くはなっても良くはならないとおっしゃったので、だめ元というか、もしもだめでもいいわ。もしも聞こえるようになったら儲けものという気楽な感じでやりました。それと、人工内耳をした後、先生に「人工内耳するのは若い方がいいんですか」と聞いたら、もちろんそれもあるんでしょうけれども、「聞こえなくなつての期間が短いほうがいい」とおっしゃいました。

それと、音楽のことですけれども、人工内耳をする前の私は、本当に音が雑音なんです。メロディーも分かりません。音色も雑音に聞こえたんです。人工内耳をしても音程は分かりません。リズムは分かります。音色はきれいになってきました。人工内耳をする前は、大好きな音楽だったのに、音楽を聴くのが嫌になったんです。雑音にしか聞こえなかったから。今は音楽が嫌ではないけれどもメロディーが分からないし、歌だったら言葉が分からないから、楽しくはないです。今はそういう状況です。

人工内耳の効果はあるが個人差も大きい

山口／人工内耳は聞くところによると、効果の個人差が非常に大きいと言われていています。専門的なことはよくわからないんですけれども、自分の体験からいえば、私の知っている人の範囲では、かなりお勧めしたい、効果が大きいと思っています。問題は人工内耳は医療の分類になっていて、福祉の分野ではないんです。だから修繕をしたときとか、機械が5年くらい経てば古くなってしまつて、新しい物を買うときには100万円ぐらいのお金がいるとか、福祉の矛盾があります。例えば、介護保険で最近高齢者には補聴器を給付してはどうかという意見も出てきていますけれども、介護保険での補聴器、福祉での補聴器、そういう分野ごとに一貫性はないというか、連続性がないというか、かなり対応の仕方がまちまちなんです。どういう制度があつて、どういう制度を利用するかによって違つてくるというのが問題で、そういう境界をなくしてしまつて、補聴器が有効な人には補聴器を、人工内耳が有効な人には人工内耳をというように、同じような条件で給付が受けれる

ようにしたいなと思っています。日本の場合は人工内耳が非常に高いせいもあるんですけども、重度の聞き分けの補聴器が有効に働かない、語音認識の悪い人が人工内耳の対象というのが今の日本の状況ですね。アメリカなどでは40デシベルくらいから人工内耳、補聴器のあまり効果のない人、先ほどのように「ば」とか「び」が分かりにくいとか、語音認識の悪い人には人工内耳というような実態になっていると思います。以上です。

参加者／一言いいでしょうか。人工内耳は皆さんバラ色のように聞こえていますけれども、私にはバラ色とまではいかなくて、ボケの花くらいなんです。ないよりはまし程度で、本当に効果があるとは言えないんですよ。静かなところで1対1だったら何とか話せるんですが、ワンワンしてたら分からないんです。もちろん電話も聞こえない。音楽ももちろん聞こえない。だけれども社交ダンスはやっています。音楽は聞こえないけれども社交ダンスはやっている。これは気分的な問題でやっているだけですよ。ですから、とにかく人工内耳はいいよ、いいよって言われても、必ずしもそうではないことを覚えておいてください。手術するときの参考にしておいてください。私は、全く効果はないとは言いませんよ。ある程度は聞こえているんですから。かなりは良くなっているんですけども、無いよりはましという程度です。

滝野／ありがとうございます。難聴は一人一人、同じ聞こえではありません。十人いたら十人の聞き方があり、それぞれ違います。なので、この方法が良いと選んでみても当てはまらないこともある。多様なコミュニケーションが選択できるように、用意しなければならないというのが私どもの立ち位置ですね。おっしゃるとおりです。

他に質問や意見がなければ、まとめに入りたいと思います。

その前に、京都府障害者支援課の山口さんが、ずっと前列で熱心に話を聞いていただきました。この「耳のことフェスタ」の事業は、京都府が主催ですですので、感想をお聞きしたいと思います。

聞こえの困難さについての共感を世の中に広めていくことが大事

**山口憲二郎（京都府健康福祉部
障害者支援課 精神・社会参加担当課長）**
／京都府障害者支援課の山口と申します。本日はこのように多くの方が耳のことフェスタに参加いただきありがとうございます。私自身もパネラーの話にたくさんの気づきをいただきましたので、施策に生かしたいと思います。

京都府では昨年3月に聞こえ条例を制定しています。言語としての手話を普及していく。あるいは、手話以外のコミュニケーションの手段も確保していく。そういう条例ですけども、一番大事なものは、聞こえ



の困難さについての共感を世の中に広めていくことだと思っていますので、こういった取り組みをこれからもたくさん、府内各地でやっていきたいと思っています。

社会の中で、当事者の方や家族の方が生きづらさを感じておられるのであれば、その社会を変えるため、皆さんと一緒になって取り組んでいきたいと思っています。この耳のことフェスタをキックオフにして活動を広げていきたいと思っていますので、よろしくお願い致します。今日はありがとうございます。

滝野／ありがとうございます。中途失聴・難聴者の立場から、聞こえとコミュニケーション・社会参加の視点で、ご意見を聞かせていただき、また、フロアからも参加していただきました。10時から14時30分まで、充実した時間を過ごしてまいりました。ここで柴田さんから、今日の話の特徴的なこと等をまとめていただきます。よろしくお願い致します。

「人生途上で聞こえなくなったこと」と「コミュニケーションが多様なこと」への対策が急務

柴田／皆さんお疲れ様でございました。日本は高齢化が進み、65歳以上の3人に1人は高齢難聴になっていくと言われていています。現在、認知症の理解を広めていこうという運動が進められていますが、認知症の人は65歳以上で7人に1人という割合です。日本で大きな課題になっている高血圧の人は65歳以上で3人に2人ということですから、難聴はみんなの問題、みんなの課題だと思います。高齢化社会では、日本全体で難聴者対策を進めていかなければいけないのではと、思っているところです。

第1回目の「京都府耳のことフェスタ」では5名のパネラーから大変貴重なお話を伺いました。私が印象に残っているのは、難聴者特有の悩みというのは、何だろうかということです。聴覚障害者といわれますが、ろうの方もいらっしゃいますし、難聴の方もいらっしゃるし、盲ろうの方もいらっしゃいます。それぞれがいろんな困難を抱えていらっしゃるわけですが、難聴者特有の悩みはどのようなことなのでしょう。今日お話しを伺って考えたことの一つは、難聴者は人生の途上で聞こえにくくなった、聞こえなくなったということです。もう一つは難聴者のコミュニケーション方法が多様だということです。ろう者は手話言語により生活をされますが、難聴者は、人工内耳の人、手話を使っている人、補聴器を使っている人、いろんな方法で筆談をされている人と、コミュニケーション手段・方法が多様です。

人生の途上で聞こえなくなったことから、同じ障害のある人の様々な経験を聞き、学ぶ場が必要です。様々な経験を聞いて、自分の生き方なり暮らしの仕方を考えていく、そういう機会を得ていく必要があるということです。

もう一つ、コミュニケーションが多様だということは、パネラーの山口さんがおっしゃいましたけれど、京都府の条例では障害特性に応じてコミュニケーションを選択していくことが権利としてあるとうたわれています。私は補聴器でコミュニケーションを取っていく、私は人工内耳をしていく、私は筆談でいく、これらはお一人お一人が決めていく選択権ですね。それを保障しようと思いますと、今日のように皆様の経験ですとか、コミュニケーション機器を実際に見たり、聞いたりして、「これがループですか」「これが補聴器で

すか」「これが字幕を映していく機械ですか」と、そういう学習の機会を得ていくことも大事ではないかと思えます。

耳が聞こえにくい、聞こえなくなって病院に行き、補聴器を装用する。ここまでは比較的早く対応されるのですが、不十分な補聴器、不十分はコミュニケーション手段を使ってどうやって充実した生活を築いていくのか、そういうところにうまく結び付かない、または難聴者協会とうまく結びつかない現状があります。パネラーの山口さんは「10年もかかってようやく難聴者協会にたどり着いた方もいらっしゃる」とおっしゃっていました。ぜひ2回目、3回目とフェスタを継続して、たくさんの市民の方、府民の方にご参加いただき、豊かな暮らしを築いていく場になることを願っています。

今回のフェスタでは、定員超過によりお断りした聞こえる方もいらっしゃるとういしました。そういう意味ではもっともっと、たくさんの方が参加できる条件を来年以降は作っていただいで、よりよいフェスタにしていっていただければと思った次第です。

滝野／ありがとうございます。聞こえの問題は、当事者の問題、当事者だけの問題ではなく、国民的課題であるという認識を、再確認ができたと思えます。さらにお医者さんであったり、補聴器業者さんであったり、事業所の会社の社長さんであったり、あらゆる人に、聞こえを取り巻く諸問題を知っていただき、普及していくことが、私どもの大事な務めになっていくと思えますので、今日の成果を力に変えて、また2回目、3回目と継続していきたいと思えます。

参加者／皆さんこんにちは。私は難聴で4級の身体障害者の手帳を持っています。私は以前、2年間理事をやらしていただきまして、その後支援をさせていただいております。

今は、障害者のスポーツ大会に積極的に出させてもらっています。去年フライングディスク大会が福井でありました。国体と全国障害者スポーツ大会共通。京都府で選考されて福井に行ってきました。福井では全国の障害者の方とコミュニケーションをさせていただきました。難聴になってから私は幸せです。ありがとうございます。

司会／これで耳のことフェスタを終わります。パネラーの皆さんありがとうございました。

